

ちから 力くらべ

むかし おとこ
昔の男の子は、相撲を取った
り、ばん持ち石を持ち上げたり
して、力くらべをしました。



かすがじんでい
春日神社の境内には、その

ばん持ち石に使われた赤目石が今も残っています。

鳥井町では、村の若い衆（青年）が集まって

「どんだけ（どのくらい）持ち上げられるか競争

しようぞ。

と、力くらべをしました。そして、赤目石の下を

あり いっせいで
蟻が一匹通るほどに、わずかでも持ち上げること

ができれば、

「おめえ、もう一人前やぞ。」

とい
と言ってほめられました。

このようならばもち石は、豊地区内の神社の境

内にそれぞれあり、力くらべをすることにより、

力のある人が村人から尊敬されました。

また、昔の子供は、小さい時から家の仕事の手
伝いをよくしたので、足腰が強く、大変力があり
ました。なかでも、鯖江山三代目になった下氏家
の手鹿平作さんは相撲取りとして有名で、次のよ
うなエピソードが残っています。

・三才の時、宇須尾（宮崎村）から米を一升、背
中に担いで歩いて帰った。

・十二、三才の時、瓦を普通の大人よりも二、三
枚多く小曽原（宮崎村）から細い山道を、天秤
棒で担いで運んだ。

・若い衆の時、友達三、四人で夜中に家を出て、
浜（越前町）まで歩いて行き、夜明けの四時頃
に、浜で水揚げされたばかりの魚を、五、六十
キ口、天秤棒で担いで武生の魚市場まで運んだ。
・若い衆の時、力くらべの真ん丸いばんもち石を
持ち上げる技は、普通の人よりずば抜けていた。